

運針作業と性格類型に関する実験的研究

斎藤 トシ・柳沢由紀子

The experimental studies on mutual relation between swing and personality

Toshi SAITO and Yukiko YANAGISAWA

INTRODUCTION

It is equally true in the case of sewing especially making Japanese clothes that maker's character influence on thier works.

On the first step to investigate this point for taking it into guidance, we tried many experiments of sewing and character tests (Y. G. character test) with two hundred students of clothing course in our college.

As a result of thes experiments, we report that the extroversive students who were sensible and adaptable, got better results and there were few differences between each other than other students.

研究目的

現在の裁縫教育、特に和服の製作において、その作品が、製作者の性格の影響を受けることは日常経験することである。心理学者 Wundt は、つぎのように指摘している。すなわち、意識、および、行動は、流動経過的な活動であるが、その活動は、いろいろな有形無形永続性をもった文化材としてあとに残る絵画、彫刻、建築、言語は勿論のこと、神話、伝説、法律、習慣など、心的活動の所産であり、その中に心的活動の傾向、特質などを伺うことが出来ると述べている。すなわち Wundt の指摘を待つまでもなく、運針、並に、和服の製作は、人間の心的活動の所産であり、その中に被験者の人格的傾向や、特質が表現されることが仮定される。今回の実験はその第1段階として裁縫の基礎技術であり、しかも、和服に多く用いられる運針と性格について実験的検討を試みた。

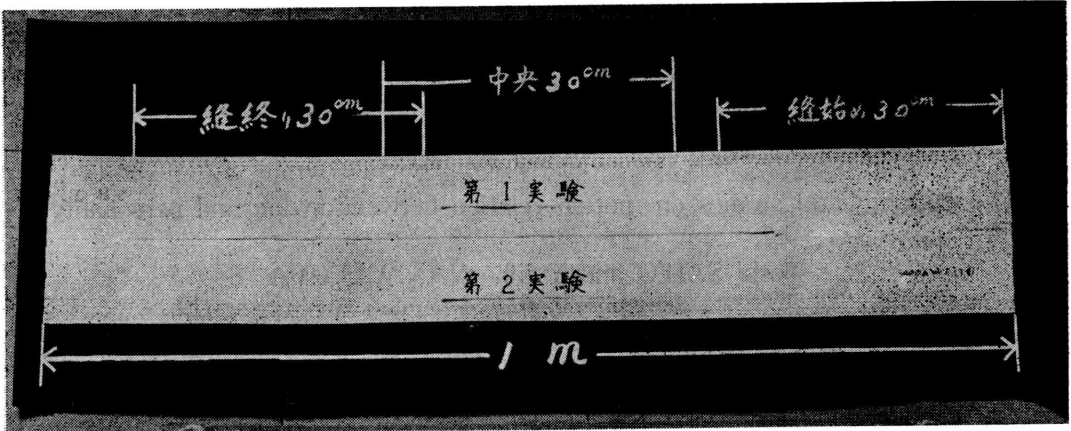
実験材料・時期及び集計方法

実験材料・時期 被験者として、本学短大被服専攻学生 200 名につぎの方法で運針を行った。

第1実験は、1年次の5月初め、午前中の被服工作時に、室温20℃ 湿度68%、照度80Lux、材料として、布は新モス、並巾、長さ1mのもの、針は、縫い針の短針で、各自の指に合った長さのもの、糸は、木綿の三子糸を使用した。

第2実験は、2年次の卒業期の2月初め、第1実験と同様に午前中の被服工作時に、室温16℃、湿度60%、照度80Lux、材料は、第1実験と同じものを用いた。両実験とも、作業開始前に短時間いっせいに休憩し、後20分間の運針をおこなった。

第I・第II運針実験及び測定箇所



性格検査は、矢田部ギルフォード性格検査（Y・G性格テスト）を用いた。運針実験に参加した学生200名に、Y・G性格テストを行い、その結果にもとづいて、被験者ABCDEの各性格類型について各々10名（もっとも典型的類型を示したもの）づつ、計50名を抽出し、各々の運針実験の結果について、つぎの集計を行った。

性格類型表（Y・G性格テスト）

	情緒	社会的	向性	記号
A	普通	普通	普通	—————
B	不安定	不適応	外向性	×-----
C	安定	適応	内向性	○-----
D	安定	適応	外向性	×-----
E	不安定	不適応	内向性	○-----

集計方法 20分間の作業量として、縫始めから終わりまでの全長を測定し、つぎに、被験者を性格類型別に、各縫始め30cm、中央30cm、縫終り30cmをとり、その間の表針、裏針の針目の長さを1目ごとにノギスで測定し、各性格類型ごとに、その平均値及び標準偏差を求め、両実験の結果を比較検討した。その結果は、図I・A～図IV・Dに図示した。

結果と結果の考察

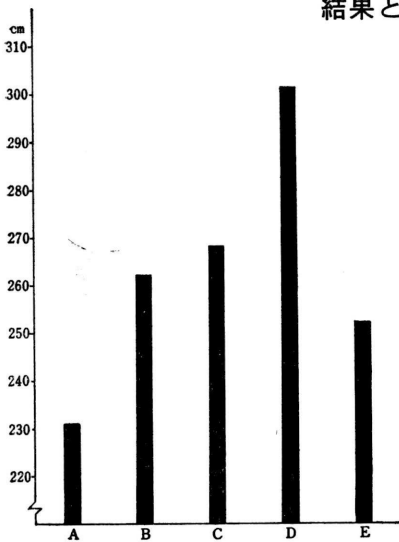


図 1・A 第1実験の運針量

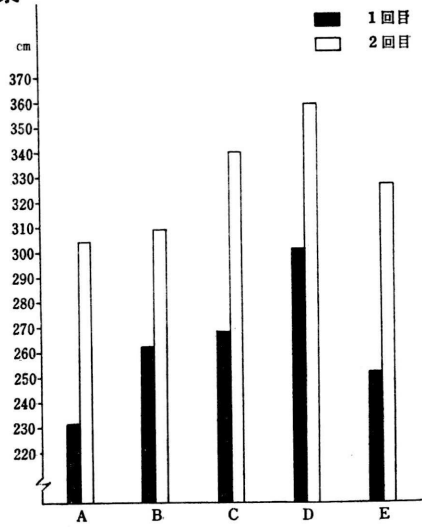


図 1・B 両実験の運針量の比較

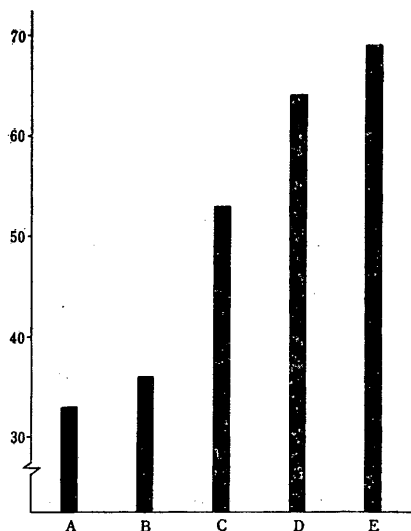


図1・C 第1実験の運針量の標準偏差

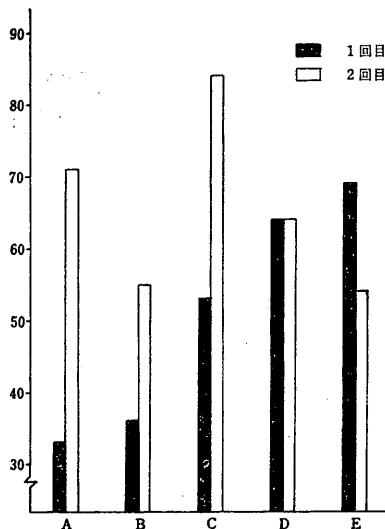


図1・D 両実験の運針量の標準偏差の比較

図1・Aは、第1実験の20分間の運針量を類型別に示したもので、運針量は、D型の性格が最も多く、301cm、A型が最小を示し、231cm、他の3型は、ほぼ同量になっている。つまりA型を除く4型をみると、情緒安定、社会的適応のC型D型の性格では、向性が外向性のD型が運針量は多くなっている。この傾向は、情緒不安定、社会的不適応のB型E型も同じ傾向を示している。

図1・Bは、第1実験と第2実験の運針量を比較したもので、全類型とも、第1実験より第2実験の運針量は多く、情緒安定、社会的適応のC型D型が、情緒不安定、社会的不適応のB型E型より運針量は多くなるが、情緒不安定、社会的不適応のB型E型のいずれにおいても、内向性のC型E型が、外向性のB型D型より、運針量の伸びが多くなっている。中庸を示すA型も運針量の伸びは多くなっている。すなわち、いずれの性格においても、1年9ヶ月間の練習効果が見られ、いずれにおいても、内向性のC型E型及び中庸をなしているA型の学生ほど、その効果は顕著である。

図1・Cは、第1実験の運針量の標準偏差を、各類型ごとに現わしたもので、運針量における個人差を示す。A型をのぞく4型を見ると、情緒安定、社会的適応のC型D型の性格では、外向性のD型が64と個人差が顕著で、情緒不安定、社会的不適応のB型E型の性格では、内向性のE型が69と個人差は顕著になっている。いずれも中庸をなしているA型性格が、個人差はもっとも最少で33を示している。

図1・Dは、第1実験と第2実験の運針量における標準偏差を比較したもので、2回目実験においては、性格による個人差がなお顕著に現われ、いずれも中庸をなしているA型が、個人差がはげしく現われ71を示し、他の4型を見ると、情緒安定、社会的適応のC型D型では、内向性のC型が2回目の個人差が大で84を示し、外向性のD型は、1回目、2回目とも個人差は、同一の64を示している。情緒不安定 社会的不適応のB型E型の性格では、外向性のB型が55の値を示し、内向性のE型では1回目69、2回目54を示し1回目の方が個人差が大である。なお1年9ヶ月間に進歩するものは進歩し、進歩しないものは進歩しないといった結果がみられる。情緒安定 社会的適応、

外向性のD型においては、平均した進歩がみられる。

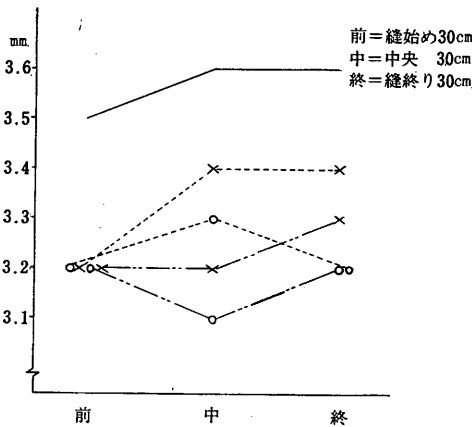


図 2・A 第1実験の針表の長さの平均

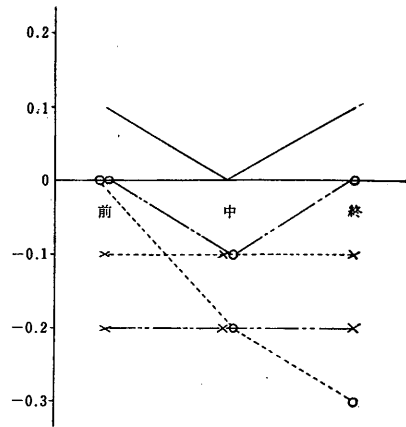


図 2・B 両実験の表針の長さの比較

図 2・A は、第 1 実験の表針の長さ、その規則性を示したもので、作業の前盤 中盤及び終盤で A 型グループの針目は、3.5mm~3.6mm の長さで、5 グループ中最も安定した作業がみられる、他の B 型 C 型 D 型 E 型では、作業の前盤では、ほぼ同長の針目がみられ、中盤及び終盤で各グループの特徴がみられる。情緒不安定 社会的不適応の B 型 E 型グループは、中盤で、針目が長く B 型 3.4mm、E 型 3.3mm、終盤になると B 型は横ばい 3.4mm になり、E 型は 3.2mm と針目は短くなる。情緒安定、社会的適応の C 型 D 型グループをみると、中盤では、D 型は横ばいで、3.2mm、C 型は非常に短くなり、3.1mm、終盤になると C 型 3.2mm、D 型 3.3mm と針目が長くなっている。情緒不安定、社会的不適応の B 型 E 型の性格のものでは、作業の中盤までは、針目は適当な長さに近づくが終盤になると短くなる。情緒安定、社会的適応の C 型 D 型の性格では、いったん短くなり、終盤では再び上昇している。

図 2・B は、第 1 実験と第 2 実験の表針の長さの比較を現わしたもので、中庸を示す A 型においては、両実験の表針の長さは、中盤で±0 と同一であるが、前盤 0.1mm 及び終盤 0.1mm と 1 回目の方が針目はあらくなっている。内向性の C 型 E 型は前盤では、いずれも 1 回目 2 回目が同一の値 ±0 を示すが、情緒安定、社会的適応の C 型は中盤では、-0.1mm と 2 回目が長くなり、終盤に至っては同じ長さ ±0 を示すが、情緒不安定、社会的不適応の E 型は中盤 -0.2mm から終盤 -0.3mm にかけて 2 回目の方が、針目はあらくなっている。外向性の B 型 -0.1mm、D 型 -0.2mm は、いずれも 2 回目が針目は長くなっているが、前盤から終盤まで同一の安定した作業を示している。

図 2・C は、第 1 実験の表針の長さの標準偏差を各類型別に示したもので、前盤、中盤、終盤にかけて、最も安定した作業がみられるのは、情緒安定 社会的適応 内向性の C 型 (0.7) 性格である。作業の前盤では、性格の外向、内向を問わず、情緒安定 社会的適応のもの C 型 D 型 (0.7・0.7) は、情緒不安定 社会的不適応の B 型 E 型 (0.6・0.6) のものよりも、針目は、不規則である。しかも、中盤から終盤になると、情緒安定 社会的適応の C 型 D 型では、外向性 D 型が、針目は、規則的になり (0.6) 終盤になると C 型 D 型 (0.7・0.7) は不規則になる。情緒不安定、社会的不適応の B 型 E 型は、中盤になると (0.7・0.7) と不規則になり、終盤になって内向性 E 型 (0.6) が、規則的になっている。いずれも中庸をなしている A 型は、最も規則的な作業が見られ

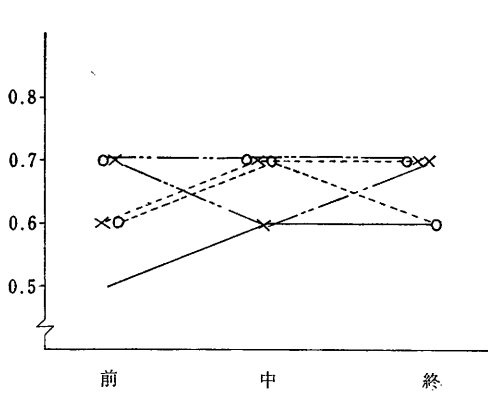


図 2・C 第1実験の表針の長さの標準偏差

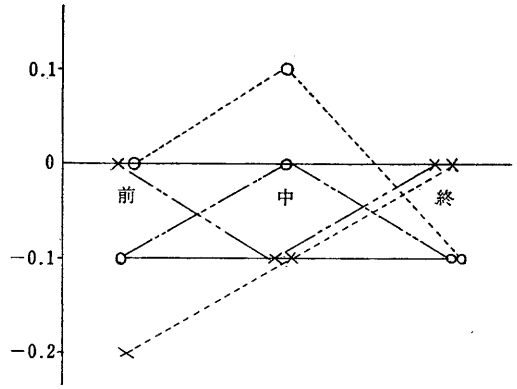


図 2・D 両実験の表針の標準偏差の比較

るが、前盤(0.5)中盤(0.6)と不規則になり、終盤は(0.6)と横ばいである。

図2・Dは、第1実験と第2実験の表針の標準偏差の比較を示したもので、いずれも中庸をなしているA型では、1回目と2回目の差は(-0.1)となり、2回目の方が、ややばらつきが大となるが、前盤から終盤まで安定した作業がみられる。外向性のB型D型において、情緒安定 社会的適応のD型では、中盤で、2回目の方が(-0.1)となるが、終盤に至って(±0)となる。また情緒不安定 社会的不適応のB型は、前盤で(-0.2)とばらつきが大となる。中盤(-0.1)終盤になると(±0)練習効果が現われる。一方内向性のC型E型をみると、情緒安定 社会的適応のC型は、前盤(-0.1)中盤(±0)終盤(-0.1)と、2回目の方がばらつきが、現われている。情緒不安定 社会的不適応のE型は、前盤(±0)中盤(0.1)終盤(-0.1)と、中盤では1回目がばらつきが大で、終盤になると2回目がばらつきが大になり、5グループ中最もばらつきがはげしく現われている。すなわち、向性による特徴が現われ、外向性が、内向性より、ばらつきが、小さくなっている。

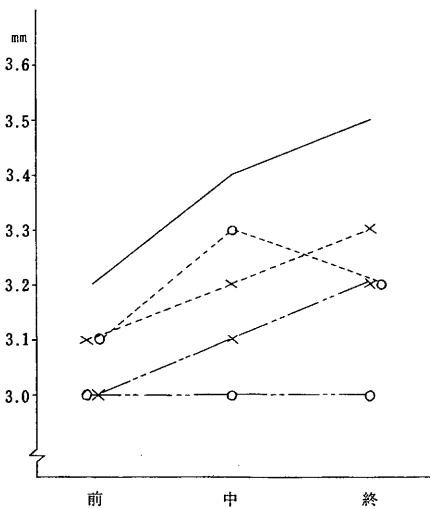


図 3・A 第1実験の裏針の長さの平均

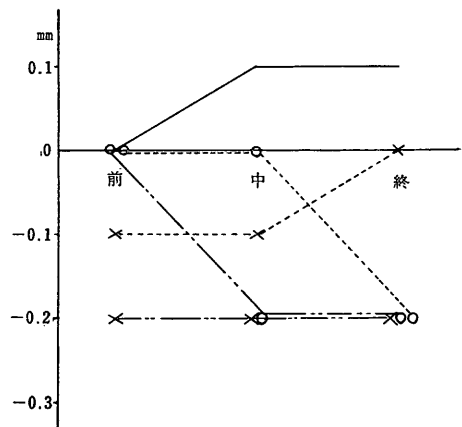


図 3・B 両実験の裏針の長さの比較

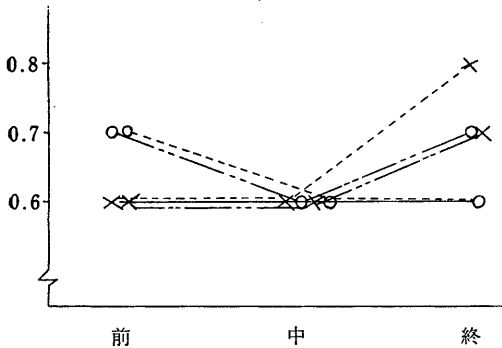


図3・C 第1実験の裏針の長さの標準偏差

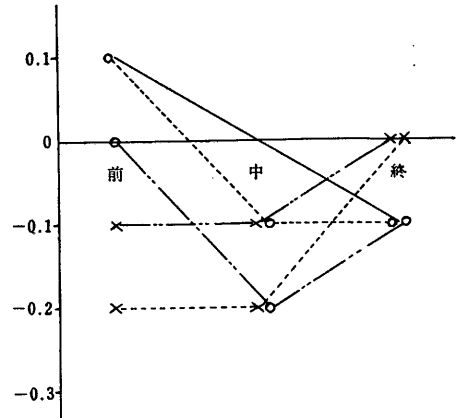


図3・D 両実験の裏針の長さの標準偏差の比較

図3・Aは、第1実験の裏針の長さの平均を各類型別に示したもので、いずれの性格においても、全般に、表針より小さく、A型グループは、前盤から終盤まで3.2mm~3.5mmと変化している。他の4型グループを見ると、作業の前盤においては、情緒安定 社会的適応のC型D型は、情緒不安定、社会的不適応のB型E型に比べ針目は、短くなっている。作業の中盤になると、C型D型では、外向性D型のものが、針目は長くなり、この傾向は、終盤に至って3.2mmと、なお強化されている。B型E型では、中盤になると、内向性E型のものが3.3mmと、針目は大きくなるが、終盤になるとその傾向は逆になり、つまり外向性B型のものが3.3mmと、針目は長くなっている。

図3・Bは、第1実験と第2実験の裏針の長さの比較を示したもので、A型の針目は、前盤では、その長さは、±0であるが、中盤から終盤にかけては、0.1mmと、1回目の針目が、やや大きくなる。他の4型をみると、2回目の方が、やや針目は、大となる傾向にある。情緒安定 社会的適応 外向性のD型は、前盤-0.2mm、中盤-0.2mm、終盤-0.2mmと2回目の針目の方が長いが安定した作業がみられる。なお情緒不安定 社会的不適応 外向性のB型は、前盤、中盤ともに-0.1mmと横ばいで、2回目の針目がやや長くなるが、終盤になると±0と同一の長さを示す。また内向性のC型E型は前盤で±0と同一の値を示すが、中盤になると、安定、適応のC型は、-0.2mmと2回目の針目が長くなり終盤まで横ばいである。不安定、不適応のE型は、中盤までは±0で、同じ長さであるが終盤に至って-0.2mmとなり2回目の針目が長くなっている。

図3・Cは、第1実験の裏針の長さの標準偏差を類型別に示したもので、作業の前盤から終盤にかけて、安定した作業を示しているのは、いずれも中庸を示すA型(0.6)である。他の4型をみると、作業の前盤で、情緒、社会的にかかわらず、外向性B型D型(0.6・0.6)、内向性C型E型(0.7・0.7)よりも、針目は規則的になっている。中盤では、4グループとも、同じ値(0.6)を示し、終盤になると、情緒不安定、社会的不適応、内向性E型が、情緒安定、社会的適応、内向性C型より規則的になり、情緒安定、社会的適応、外向性D型は、情緒不安定、社会的不適応、外向性B型よりも規則的になっている。なお、情緒安定、社会的適応のC型D型は0.7と、同じ傾向を示している。

図3・Dは、第1実験と第2実験の裏針の長さの標準偏差の比較を示したもので、A型は前盤で

は0.1と1回目の方が、ばらつきがみられるが、中盤では±0、終盤になると-0.1と、2回目の方が、ばらつきが多くなっている。また他の4型をみると、向性による特徴が現われ、外向性B型D型(-0.2・-0.1)は、内向性C型E型(±0・0.1)より、前盤においては、2回目の方が、ばらつきが大であるが、中盤になると、いずれも特性にかかわらず、D型E型(-0.1・-0.1)は、B型C型(-0.2・-0.2)より、ばらつきは小さくなり、終盤になると、外向性B型D型(±0・±0)は、内向性C型E型(-0.1・-0.1)より、練習効果が現われ規則的ではばらつきがなくなる。

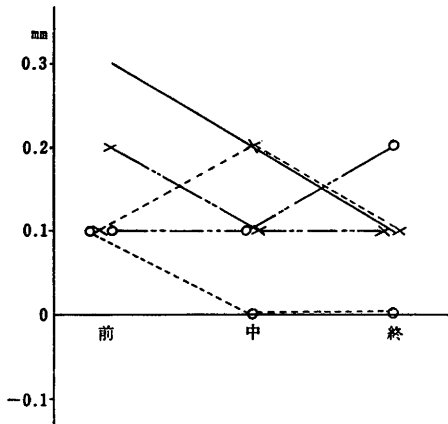


図4・A 第1実験の表針と裏針の差

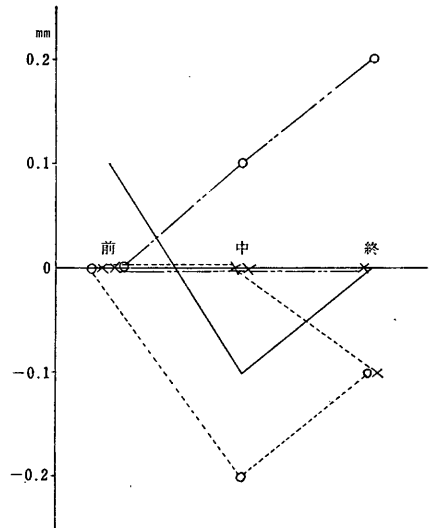


図4・B 両実験の表針と裏針の差の比較

図4・Aは、第1実験における表針の長さの平均から裏針の長さの平均を減じた値を類型別に示したので、全盤に、表針は裏針より針目は大きく、この傾向は、中庸を示すA型の性格でより顕著であり、中盤から終盤にかけて0.2mm, 0.1mm, とその差は、ちぢまる。情緒不安定 社会的不適応 内向性E型の性格では、表針と裏針の差は、前盤0.1mm, 中盤 終盤で±0と、なっている。情緒安定 社会的適応のC型D型では、内向性C型が、前盤 中盤 0.1mmで、終盤になると表針が、非常に大きく0.2mmを示し、作業の前盤において、外向的性格では、D型(0.2mm) B型(0.1mm)にくらべ、針目が長く、中盤に至って、その傾向は逆になり、終盤では同傾向(0.1mm)を示している。

図4・Bは、第1実験と第2実験の表針と裏針の差の比較を示したもので、中庸を示すA型は、前盤0.1mm, 中盤-0.1mm, 終盤±0の値を示し、前盤から中盤までは、両実験の差がはげしく現われ、終盤になるとその差は減少し練習効果が現われている。他の4型を見ると、前盤では±0と同一の値を示すが、中盤になると、内向性C型は0.1mm, E型は-0.2mmと両実験の差が、反対の傾向を示し、C型は第1実験が針目が長く、E型は第2実験が針目が長くなっている。終盤になると、情緒安定、社会的適応のC型は、その傾向がより強化される。情緒不安定、社会的不適応のE型は、第2実験の針目の長さがやや小さくなる。外向性B型D型は±0と、中盤までは、第1実験第2実験の差は、みられないが、終盤になると、情緒不安定、社会的不適応のB型が-0.1mmと、第2実験の針目が長くなっている。情緒安定、社会的適応のD型は、終盤まで、第1実験第2実験の差はなく、終始安定した作業を続行している。

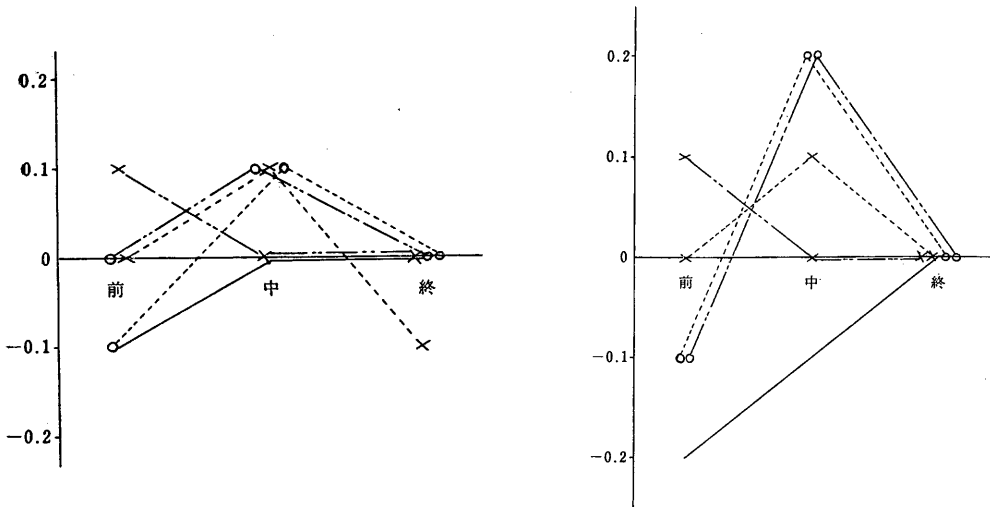


図 4・C 第 1 実験の表針と裏針の差の標準偏差 図 4・D 両実験の表針と裏針の差の標準偏差の比較

図 4・C は、第 1 実験の表針と裏針の長さの差の標準偏差を類型別に示したもので、いずれも中庸を示す A 型は、前盤 (-0.1) と、表針にらべ裏針の方が、不規則であり、中盤から終盤にかけては (±0) と表針と裏針の差はなくなり、規則的になっている。他の 4 型グループを見ると、前盤では、いずれも特性に関係なく、情緒安定、社会的適応、内向性 C 型と、情緒不安定、社会的不適応、外向性 B 型が、表針と裏針の差はなく ±0 を示し、情緒安定、社会的適応、外向性 D 型は、表針の方が不規則で (0.1)、情緒不安定、社会的不適応、内向性 E 型は、裏針の方が不規則で -0.1 を示しているが、中盤になると、情緒安定、社会的適応、外向性の D 型をのぞく 3 型 B 型 C 型 E 型は 0.1 の値を示し、表針の方が裏針より不規則であり、情緒安定、社会的適応、外向性 D 型は ±0 と表針と裏針の差がなく、規則的である。終盤になると、B 型をのぞく 3 型は ±0 と、表針と裏針の差が無く規則的な安定した作業になっている。B 型は -0.1 と裏針が表針より不規則になっている。

図 4・D は、第 1 実験と第 2 実験の表針と裏針の差の標準偏差を比較したもので、A 型では前盤 -0.2 と第 2 実験の方に、ばらつきがみられるが、中盤 (-0.1) 終盤 (±0) と両実験の差はなくなる。他の 4 型は、向性の影響により特徴が現われている。内向性 C 型 E 型は、前盤では、第 2 実験の方が (-0.1) とばらつきがある。外向性 B 型 D 型では、情緒不安定、社会的不適応の B 型は (±0) と両実験のばらつきはなく規則的であるが、情緒安定、社会的適応の D 型は (0.1) と第 1 実験の方にばらつきが見られる。中盤になると、内向性 C 型 E 型は、前盤とは、反対の傾向になり (0.2) と第 1 実験の方が、ばらつきが大きくなっている。外向性 B 型 D 型は、情緒安定、社会的適応の D 型は (±0) となり両実験のばらつきがなくなり、情緒不安定、社会的不適応の B 型は (0.1) と第 1 実験の方がばらつきが大きくなっている。終盤になると、いずれの性格においても (±0) と両実験のばらつきがなくなり規則的になっている。

結 び

以上の集計から、つぎの結論に達した。まず運針量においては、いずれの性格類型とも、1 回目運針より、2 回目運針の方が多くなり、すなわち、各グループとも一応の進歩がみられる。しかし、

その個人差は、性格による影響が顕著で、情緒安定、社会的適応、外向性のD型が、1回目実験と全く同じ値を示し、差は大となり、すなわち、練習によって性格の比較においては、中庸の性格A型は、1回目の方が、針目は長く、練習効果がみられる。他の4型では、いずれも、2回目の方が、ややあらくなっているが、向性による特徴が現われ、外向性のB型D型は、2回目実験において、安定した作業がみられ、一方内向性のC型E型は、やや針目が、不規則で安定度は、低くなる。また個人差をみると、内向性のC型E型は、外向性のB型D型より、作業の始めでは、個人差は少く安定しているが、作業の進むにつれて、その差は逆の傾向を示し、外向性B型D型に平均した進歩がみられる。これに反し、内向性C型E型は、作業の進むにつれて個人差が大となる。なお、情緒安定、社会的適応の性格は、情緒不安定、社会的不適応の性格のものより、針目の規則性も大で、個人差においても2回目実験の方が平均化している。

以上の通り、今回の実験では、向性で、外向性の方が、進歩がよく、情緒安定、社会的適応のものは、情緒不安定、社会的不適応よりも、比較的作業が安定していることが認められた。

我々の研究には、なお、多くの問題点はあるが、縫製の基礎技術としての運針作業は、各人の性格、特性に影響されることを見出した。

本研究に当り、被験者として協力して頂いた学生各位、また、御校閲を賜った、本学松井和哥教授、また、御懇切に御指導賜った、本学島田俊秀助教授に心から謝意を表します。

(本論文は、日本家政学会第23回総会及び第24回総会において、発表したものにさらに新資料を加えたものである。)

参 考 文 献

- 1) 中井節雄：人事権査法 竹井機器工業株式会社 p.85~156
- 2) 今田 恵：心理学 岩波書店 p.30~40 (1954)
- 3) 齊藤トシ、本郷美枝：東京家政大学研究紀要第5集 p.52 (1965)
- 4) 齊藤トシ、本郷美枝：東京家政大学研究紀要第8集 p.69 (1968)
- 5) 齊藤トシ、本郷美枝：東京家政大学研究紀要第9集 p.67 (1969)